

## 評伝 矢内原忠雄 (一)

### A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part I)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

#### 第一章 故郷と生い立ち

##### 一 故郷、今治

矢内原忠雄の故郷は、現在の愛媛県今治市である。忠雄出生時は、愛媛県越智郡富田村であった。富田村は一八八九(明治二二)年十二月十五日、政府の町村合併を勧める町村制施行に伴い、松木村ほか六か村が合併して出来た村である。今治市に編入されたのは、第二次世界大戦後の一九五五(昭和三〇)年二月一日である。明治期の合併成立前の松木村がそのまま大字となっている。矢内原家の所在地は、大字松木一三六の二となる。松木は地元では、マツ

ギと濁って読む。

今治市はタオルと造船・海運の町である。タオルは全国一の生産量、全国生産高の約六割の実績を誇る。市内にはタオル美術館というタオルをテーマとした珍しい美術館さえある。が、近年生産量は伸び悩みの状況という。他方、造船・海運の町としての今治は、今や「日本一」の名を得るまでになっている。瀬戸内海という地の利を得てのことであるのは、言うまでもない。また、一説に中世に活躍した「河野水軍」「村上水軍」の伝統の継承ともいう。市内には約二十の各種船舶を建造する造船所があり、輸送用機械工業もきわめて盛んである。

今治は、もと藤堂氏、続いて松平(久松)氏の三万石の城下町であった。今治城は、五層六階の天主閣をはじめとする昔の姿を今に誇る。この城は、藤堂高虎によって築かれたが、慶長年間に丹波亀

山城に移築された。今の城は、一九八〇（昭和五五）年に長らく幻の城とされていたのを、古写真・古文書などの資料により再建したものだ。高虎は築城の名人であり、城は三重の堀に海水を引き込んだ海岸平城である。高虎時代は「舟入」と呼ばれた港灣を造り、「水軍」の船を自在に操ったものだという。今治では藤堂高虎を町の開祖として観光のシンボルの扱いをしている。近年（二〇〇四、平成一六年）、築城・開町四〇〇年を記念して、高虎の銅像が城内に建立された。

矢内原忠雄の評伝を書くために、第一に訪れたのが、この四国の瀬戸内海に面する今治市南部の松木の地であった。わたしは評伝を書く場合、必ず現地調査に赴く。文献だけの調査には限界がある。対象とする人物の生地や生い立ちの地を調査するのは、評伝作家にとって必須の条件だ。こうした労を惜しんだ評伝は、どうしても瘠せたものとなる。

今治はわたしにとって、はじめての地である。地図をよく見ると、今治市は愛媛県の北東部に位置し、瀬戸内海に突き出た高縄半島の東半分を占める。行政的には芸予諸島などの島嶼をも含む。現在は本州の尾道や福山から瀬戸内しまなみ海道（西瀬戸自動車道）を経て、今治に行くことができる。わたしは福山からバスで、しまなみ海道を経て今治入りした。この道路は、一九九九（平成一一）年五月に開通したものである。瀬戸内海に浮かぶ島々に九本の橋を架けて、本州と四国を結んだ道だ。長さは約六〇キロメートルに及ぶ。美しい景観が売り物の、まさに海の道である。特に三連吊橋来島海峡大橋付近の眺めが素晴らしい。福山からの時間は、一時間二十四分ほどであった。

今治市に到着したわたしは、まず丹下健三設計の市役所を訪れた。丹下健三は生まれは大阪府の堺市だが、両親が今治出身で、幼年時代を中国上海に過ごしたものの、両親が今治に戻ったことから、今治第二尋常小学校を経て、旧制今治中学校（現、今治西高校）を卒業している。それゆえこの町とは関わりの深い建築家である。広島平和記念館・東京都庁舎の設計などでも知られる。

市役所では観光課に行き、愛媛県観光ガイドマップをはじめ、さまざまなパンフレットを貰った。対象とする人物研究をはじめの第一歩を、生い立ちの地の市役所からはじめるというのは、地元に関するエリア地図をはじめ、さまざまな資料に出会えるからである。中に思いも寄らぬ記事を発見することがある。今回も同様の経験をした。貰った資料の中に、「海事都市いまばり」とのタイトルをもつ四つ折りのパンフレットがあった。中の「今治ガイドランス」に、「今治キリスト教会と蘆花」と題するコラムに、わたしの目はとまった。短い記事なので、全文を引用する。

現在、市内南宝来町にあるキリスト教会は（設立時は他の場所）、明治12年に中国・四国地方で最初に設立された由緒あるプロテスタント系教会だ。設立式には同志社大学の創立者である新島襄さんも出席してくれたんだよ。

初代牧師は横井時雄という人で、のちの文豪・徳富蘆花は横井牧師の従兄弟だったので、伝道を手伝うため今治に約3年滞在し布教活動に励んだんだ。戦前の今治は「キリスト教の町」として全国でも有名な町だったんだ。（原文は横書き）

わたしはこの記事に触発され、帰宅後、まず日頃利用している『日本キリスト教歴史大事典』<sup>1</sup>で、「今治教会」の項を調べた。そして末尾に記された参考文献を見、その一つ、今治教会の『創立九十年記念誌』<sup>2</sup>を、さっそくインターネットの「日本の古本屋」を通して手に入れることになる。この本では、飯峯明「今治教会創成期の人々」が、他の記事に抜きん出る。四千字詰原稿用紙で約三十八枚、文末の「参照資料」も役立つ。飯峯明の文章によると、今治教会が設立されたのは、一八七九（明治一二）年九月二十一日、町制を施行前の今治村の時代である。が、前史をたどるとその三年半前の一八七六（明治九）年四月、神戸教会の宣教師ジョン・レイドロウ・アッキンソンらが、今治に来て伝道をしたのにはじまる。アッキンソンはイギリス・ヨークシャーの生まれ。アメリカに移住し、シカゴ神学校を卒業、アイオア州の教会で牧師を務めた後、一八七三（明治六）年秋、日本伝道を志して来日したのであった。彼はアメリカン・ボードの宣教師として岡山・高松、そして今治など西日本の伝道に当たった。

今治教会初代牧師の横井（伊勢）時雄は、熊本バンドから同志社を卒業、新島襄から按手札を受けて牧師となった。横井は徳富蘆花の従兄に当たり、その縁で蘆花は一八八五（明治一八）年三月、熊本メソジスト教会で受洗した直後、横井の許に来て今治教会の伝道を応援している。伝道の傍ら英語を人々に教えた。吉田正信校注の『蘆花日記七』<sup>3</sup>には、今治滞在中蘆花は二度、中予の松山を訪問している。一度は伊予基督教青年会の発会式のためで、徒歩で松山入りしたと蘆花は書いている。先の「今治キリスト教会と蘆花」と題するコラムには、蘆花は「約3年滞在中し布教活動に励んだ」とある

が、蘆花は翌年六月には京都に行き、九月、同志社に再入学するという年譜に照らすと、これは間違いのようだ。

それはともかく、今治教会の歴史を調べ、わたしは今治が戦前「キリスト教の町」として、全国でも有名だったという「今治ガイダンス」の記事が、決して誇張ではないことを理解した。今治教会の『創立九十年記念誌』には、エム・エル・ゴードン、吉田勇訳の「日本に於けるアメリカン・ボードの伝道」という一文があり、横井時雄牧師にふれている。中に「伊勢時雄牧師は極めて勤勉に働いた。彼の教会は彼と共にあった。彼は近隣は勿論のこと、離れている町や村にまで手を延ばした」（傍点筆者）とある。「伊勢時雄牧師」とあるのは、十一歳の時、父横井小楠が攘夷派の刺客によって暗殺されたことから、以後、時雄が用いていた名前である。横井の名に復するのは、渡米中の一八八九（明治三二）年頃のこととされる。

今治教会は初代牧師横井時雄の熱心な指導により、大きく成長し、四国を代表する教会となる。横井在任中に会員数は四百名近くに及んだというから、日本では稀な大教会である。『日本キリスト教歴史大事典』の「今治教会」（執筆、飯峯明）には、「草創期のプロテスタント教会としては珍しく一般市民によって創立された教会として注目される。その後は旧土族らの入会者も続いたが、勤勉で禁欲的な町衆を中心とした教会の性格は第二次世界大戦まで続いた」とある。今治教会は一八九七（明治三〇）年、愛媛県会の公娼施設増設建議案が出た際、反対運動を盛り上げ、承認決議がされると今治町議会を動かす、反対決議をさせる。さらに一九一八（大正七年）、旧近見村に公娼施設設置の動きがあった時は、反対運動を盛り上げ、その阻止に成功する。禁酒運動も早くから展開している。一

九〇五（明治三八）年以降は、部落解放に関する啓蒙運動も行っていた。

矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』<sup>①</sup>はじめ、いくつか存在する矢内原の生涯に関する著作や論文は、矢内原忠雄のキリスト教との最初の接点を、神戸中学校（神戸一中、現、兵庫県立神戸高等学校）時代（校長鶴崎久米一は、クラークの教えを受けた札幌農学校出身であった）に求めるのが、一般的である。が、わたしは市役所で貰ったパンフレットを手掛かりに、今治教会の歴史を知るに及んで、矢内原忠雄のキリスト教との接点が、早く幼少時を過ごした故郷にあつたのではないかとの思いを懐くことになる。彼が生まれ、育つた愛媛県越智郡富田村松木の地は、今治の中心地からわずか四キロの距離である。当時からこの地方の中心は、旧今治町であつたから、今治の旧市街には、幼少時の忠雄も行くことがあつたに違いない。そうした折に伝道の盛んな「キリスト教の町」での路傍伝道などにふれたことも想像される。また、勤勉で禁欲的な町衆や旧士族の加わつた教会は、町の政治を動かすほどであつたというから、その余波は周辺の村々にも及んでいたはずである。

矢内原忠雄自身は、「私は如何にして基督信者となつたか」<sup>②</sup>で、「私の郷里の今治は明治初年から基督教が伝はり、殊に横井時雄氏の伝道地として有名でありました。併し附近の農村には殆んどその影響がなく、私の村には一人の基督信者もありませんでした」と書く。が、信者は出なくとも、教会に出席したり、路傍伝道での話を聴いたり、聖書をもらつて読んだ人は、松木の地にもいたことであろう。右の「私は如何にして基督信者となつたか」には、最初に聖書を読んだのは、腹違いの姉文代が持つていたものであつたとあ

る。その聖書は、時代からして今治教会とのかかわりあつてのことと思われる。確かに開明的な町と異なり、いまだ旧弊を脱さない農村部における布教は難しいものである。けれども、キリスト教の存在を忠雄が知つたのは、生い立ちの地であつたのは確かである。キリスト教との直接的な関わりは、後年の一高時代のこととなるものの、今治の郊外に育つた彼に、キリスト教の光が、早くもかすかながら差し込んでいたことは、今治の歴史そのものが語る。

さて、今治駅から市の南部松木に行くには、JR予讃本線か、今治駅前から出ているバスに乗る。二つの交通手段は並行して走る。予讃線には、今治から一つ目の駅に伊予富田駅がある。しかし、単線のため本数が少ない。一時間に一本というところか。わたしはバスを用いたが、こちらも本数は少なく、しかも九時台というのに乗客は二、三人、運転手によると県からの補助を受けての、やつとこさの運行とのことであつた。人口の減少した現在、松木を含む旧富田村から今治に出るにはマイカーが主要な手段となつている。昔は多くは徒歩で今治の町に出た。四キロほどの距離なので、小学生も上級生になれば、さして遠い距離でもない。第二次世界大戦後になつても、小学校の上級生が学校行事の映画鑑賞で今治の映画館に行く時などは、徒歩であつた。

矢内原忠雄の生地、松木を含む旧富田村は、頓田川左岸の地にある。北には蒼社川右岸の立花村が存在した。西は鴨部村に接し、東は、瀬戸内海燧灘に面する。村内には拝志川という田の中を流れる小川があつた。忠雄はこの小川を愛し、「拝志川」という詩を作っている。忠雄には豊かな文学的感性が備つていた。松木には現在、県営の住宅団地や民間のアパートもところどころに見かける。今治

郊外の住宅地としての発展はめざましく、会社勤務者が多くなったからである。が、総じて農業を主体とした地区であることには変わらない。現在は酪農が盛んなようだ。忠雄の幼少期は、越智郡そのものが農業の盛んな、緑の多い豊かな田園地帯であった。二つの河川に囲まれた富田村は、土壌も肥え、農業に適していた。

今治市の「市の木」は、くすの木だが、松木の地にもくすの木の多い。くすの木は常緑高木で、春にはむくむくと新緑の葉が芽生える。遠くからでもくすの大木はすぐわかる。くすの木は、学校に植樹されたり、街路樹に用いられたりする。わたしの訪れた五月、今治駅から市役所に向かう道路に街路樹として植えられたくすの木は、新緑を燃え立たせているかのようであった。

また「市の花」は、つつじになっている。つつじは今治の気候風土に合う木なのである。公園や各家庭の庭に多く栽培されているのを見かける。松木の矢内原忠雄生家跡も、春はつつじやばたんをはじめとする春の花が、庭を美しく飾る。忠雄の弟啓太郎に「私共の家譜と生家」という小文があるのを、全集月報で知った。そこには、「土蔵と母屋の間に花壇を設け四季の花と色々の植木鉢が並べられ……」とある。今はここに書かれている土蔵も取り壊されているものの、花や樹木を愛する気風は、いまだに跡を引き継いだ家に伝わっているかのようで、わたしの訪れた日も、満開のつつじが庭を飾っていた。矢内原家は代々農業を営み、伊予国越智郡郷村から忠雄の曾祖父矢内原周宅の時代に松木村に移って、医業をはじめたのである。家系のごときは、のちに述べる。

愛媛県、——旧伊予国は、東予・中予・南予の三つに大別される。東予は今治・西条・新居浜方面、中予は県庁所在地の松山・伊

予・八幡浜方面、そして旧大洲藩以南の大洲・西予・宇和島・津島方面が南予である。言うまでもなく中予の松山は、正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐・松根東洋城・中村草田男・石田波郷などの俳人を生んだ。その余波は東予の今治にも及ぶ。愛媛県は俳句王国なのである。俳句や書道のたしなみは、今治の知識人の条件であった。矢内原忠雄も若き日、句作の試みをし、書道をしつかり学んだ。彼は「梧蔭」と称した号をもつ。

中予出身の学者や文学者には、漱石門下の安倍能成やノーベル賞作家の大江健三郎がいる。南予の宇和島からは、政治小説作家の末広鉄腸・須藤南翠、明治の国文学者大和田建樹が、その南の津島町からは、一高で一緒になる後年の哲学者藤岡蔵六が出ている。

一口に愛媛県といっても、東予と南予とは大分違う。わたしは今予の松山には何度も足を運んでいる。愛媛大学法文学部で集中講義を行った際には、一週間ほど滞在し、この町を歩き回った。また、南予は『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』<sup>7)</sup>を書くために訪れたことがある。東予は今回はじめて旅して、島嶼と都会、海岸寄りの町と山寄りの町との違いも知った。

が、総じて愛媛県、旧伊予の国は、瀬戸内海の明るさと海の幸、くすの木に代表される古木・大木、それに山間の蜜柑畑が印象に残る県である。松山市が住みたい町の上位に常にランクされる理由もよくわかる。矢内原忠雄の生まれ、育った東予の町今治は、地方都市としては豊かな、そして市のパンフレットが、戦前の今治を「キリスト教の町」として宣伝するほど、ピューリタンの気風を宿した町であった。

## 二 出生と父母・兄弟

矢内原忠雄は、一八九三（明治二六）年一月二十七日、前述のように、愛媛県越智郡富田村大字松木一三六の二番地で生まれた。父矢内原謙一、母松枝（マツ子）の四男である。上に兄が三人、下に妹が二人と弟が一人いた。上の兄二人は夭折している。残った兄弟は、上から安昌・忠雄・悦子（エツ子）・千代（チヨ）・啓太郎の五人である。生家は「半医半農」であった。忠雄は生家と父母、祖母に關して、以下のように記している。

私は愛媛県今治港から一里半程奥に入った農村に生まれました。戸数五十戸ばかりの小さい部落で、誠に平凡な田舎であります。父は医者でありましたが祖母が農業を好みましたので、家としては半医半農でありました。父は明治初年未だ西南の役の起る前に京都に出て医学を修めた、地方切つての最初の西洋医者でありました。儒学の感化を受けた人と見えまして、人は誠実でなければならぬこと、正直でなければならぬことを毎日のやうに私共子供に言つて聞かせました。『金を積んで子孫に遺すも子孫必ずしも能く守らず、書を積んで子孫に遺すも子孫必ずしも能く読まず、若かず陰徳を冥々の中に積んで子孫長久の計を為さんには』と漢文で自筆して柱掛けにして居たのを私は子供心に記憶して居ます。恐らくそれが父の人生観であつたのでせう。父は多くの人に騙されながら、多くの人を助けてました。

祖母は農業の勤勞が本當に好きで、私なども時々畑の手伝ひをさせられました。祖母は又熱心な仏教信者で、三度の食事は必ず先づ仏壇に供へお勤め（礼拝）してからでなければ自分の箸を取りませんでした。よく氣の付く人で又仕事の出来た人でしたから、家の者に向つては口喧しいこともありましたが。併し仏前又は貧しき人の前の祖母は柔和でありました。部落中一番貧しい老寡婦が祖母の最大の親友でありました。特殊部落から来る物貰ひが私の家の戸口に群れ、祖母の姿の見える迄いつまでも待つて居ることも度々でありました。

母は身体の弱い人でありましたが、よく家事を整へて居ました。控へ目な母については之と言つて書くべき事がありませんが。併しその全体が愛でありました。

父謙一に關しては、忠雄の「医学に望むもの」という文章に、「私の家は四代位前から医者でした。郷里は愛媛県ですが、父は明治九年頃京都に出て西洋医学を学んだ人です。郷里の今治から大阪まで帆船で一カ月程かかり、それから淀の川舟で京都まで出たのだそうです。今の府立医大の前身である医学校でオランダ人やドイツ人の先生から学んだそうです」とある。学業を終え、京都から帰つた父謙一は「地方切つての最初の西洋医者」となる。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、「たいへんな評判で、患者はひきもきらぬ有様であつた」とある。彼は教育に熱心で、村の学務委員などを引き受けていた。

忠雄は父謙一四十歳、母松枝二十歳の時の子であつた。父母には二十歳の年齢差があつた。父謙一は元望月家の五男であり、叔父の

矢内原清三郎家に婿入りし、松枝と一緒にになった。いとこ同士の結婚であった。矢内原家の家譜、「矢内原忠雄の家系」は、右の『矢内原忠雄伝』に詳しい。そこには遺族ならでは知り得ない、複雑な事情が語られている。細かいところは、それに譲ることとし、ここには父母の性格や忠雄に与えた影響にふれておくことにしよう。父謙一の場合は、右の文章がよく語っている。が、母松枝のことは、かなりはしょっている、別の文献に依らざるを得ない。忠雄の弟啓太郎に「私共の家譜と生家」という文章があることは、先にふれた。そこに松枝について書いた箇所がある。引用しよう。

母松枝は明治五年（一八七二）に生れ同十九年（一八八六）十四歳で三十四歳の父と結婚し、長男豊は二歳で次男兼輔も生後二日で死亡しましたが、その後安昌、忠雄、悦子、千代、啓太郎の五人を生み、明治四十五年（一九二二）四十歳で脚氣症状で召されるまで、子女の養育のかたはら家政を守り大家族を指揮し、二人の子供を失ひ、辛苦の数々を経験し、力尽きて、倒れた感がありますが、私には慈母であつた印象のみが残つてゐます。ことに晩年近く、私が重い病気で数ヶ月も生死の間になつた時には並々でない苦労があつたと思ひます。その上私は未熟児で生れ、母乳がなく生来虚弱で度々重い病にかかり、成長が危まれてゐたものが今日在るを得たのは御恩恵によるものではあります、父母の慈愛の賜と思ひます。母の召された時私は十歳でありました。

松枝は背の高い人だつたという。それが子どもたちにも遺伝した

のか、矢内原忠雄も背の高い人となる。右にわたしは、子息矢内原伊作の著書『矢内原忠雄伝』には「遺族ならでは知り得ない、複雑な事情が語られている」と記したが、それは謙一の内妻についても言える。忠雄の父謙一と母松枝が婚約した時、松枝は未だ十四歳、そこで義父の清三郎は、「別の女性を迎えて謙一の内妻とした」という。

伊作はさりげなくこの事実を語る。以下のようだ。「こういう女性メは妾と呼ばれた。こういうことは昔はよくあつたことのようにである。この女性は宮崎千賀子といい、謙一とのあいだに女の子ができた。つまりのちに松枝が産んだ忠雄のきょうだいたちにとつては、異腹の姉である。この姉の名が文代で、明治一五年生まれだから、忠雄よりは一一歳年長である。文代は謙一の弟の越智政造の家にあづけられ、そこで養育されたが、のちに謙一にひきとられ、謙一の書生だつた医師野間音一と結婚した」と。普通ならば隠したいような家系の秘事を、さら々と書き流すところに、忠雄伝の著者、矢内原伊作の並々ならぬ表現力と懐の広さを感じる。

松枝は夫謙一に、宮崎千賀子という女性がいたことを知つての結婚であつた。二十歳も年上の男性、しかも、彼には面倒を見る一族公認の女メがおり、子どもさえいた。松枝はそうした男性と結婚し、家のため子どもを産むのが宿命であつたかのように、次々と七人も産む。彼女は最初の二児を早く亡くし、次に生まれた五人の子を育てることに生涯を費やして、四十歳の若さで死んだ。愛情深い、哀れな女性であつた。

次に兄弟について簡単に記しておこう。長男豊は二歳で、次男兼輔は二日で死亡、そして三男安昌は、一八九〇（明治二三）年十二

月二日の生まれなので、忠雄の二歳ほど年上である。忠雄ともつとも交わりをもった兄弟である。追い追い述べるが、忠雄は小学校は安昌とともに一時机を並べて勉強している。中学校は下の学年にいたが、安昌の落第で、同じ学年になりそうになったこともある。そのいきさつは後で述べる。四つ下の妹悦子は、一八九七（明治三〇）年六月の生まれ、のち医者の子田原茂に嫁した。その下の妹千代は、一八九九（明治三二）年七月の生まれ、のち門田武雄に嫁すも、三十六歳の若さで早死にした。末弟啓太郎は一九〇二（明治三五）年六月の生まれ、のち医師となり、鎌倉で産婦人科を開業する。忠雄は夭折した兄二人を別にすると五人兄弟の第二子ということになる。

松木の矢内原家には、他に祖父矢内原清三郎の妻とよが健在であった。清三郎は忠雄出生の翌年、一八九四（明治二七）年一月二十七日に七十二歳で亡くなっていた。そこで祖父の影響は、忠雄にはさしてない。が、先に引用した忠雄の文章にもあったように、祖母とよの影響は大きかった。とよは夫逝去時、五十七歳、以後矢内原家をしょって立ち、八十二歳で逝くまで、忠雄ら孫の養育に一心に当たった。これまた矢内原啓太郎の回想「私共の家譜と生家」によると、「祖母とよは体格の大きい頑健な女丈夫で、私共の祖父や父母の没後もながく生存し、大正八年（一九一九）八十二歳で逝くまで、幼い私共の養育に当り慈愛に富み仏信厚く、私共は度々僧の説教を聞く時つれて行かれ、聞いた説教の概要をうちの者や雇人達にも話し、時々仏教の話をしたり経を暗誦し、又記憶よく曾祖父や祖父の事蹟を話していました。又貧困薄命の人にはをしみなく援助し、隣村の貧しい部落の人達とも交際し、時には道に行きくれた四

国巡礼の癩病人を家に泊めたことも度々でした」とのことである。忠雄はこの偉大な祖母の影響をなにかと受けている。矢内原伊作はそれを三つに分けて説明する。その第一は勤勞の貴さであった。祖母は外で鋤を取り、内で縫い物をする。その勤勉さは尋常ではなかった。第二は宗教的態度である。祖母は三度の食事は必ず先ず仏壇に供え、はじめて箸を取った。第三は貧しい者をいたわる慈悲心であった。祖母は巡礼者のハンセン病患者を泊め、貧しい寡婦と交わった。後年の忠雄の勤勉さ、無教会主義の熱心なキリスト教信者、それに全国各地のハンセン病療養所を慰問するという行為には、多分に祖母とよの感化を見出せる。

### 三 富田尋常小学校と二つの高等小学校

一八九六（明治二九）年四月、兄、矢内原安昌が満六歳で富田村立富田尋常小学校に入学した。この二歳上の兄と忠雄とは仲がよく、生涯深いかかわりがあった。小さい頃は、よく喧嘩をしたものの、互いに相手をよく理解した。すぐ下の妹悦子（エツ子）は、前年に生まれたばかりで、兄が小学校へ入学した後、忠雄は遊び仲間を失ってしまう。それは幼い彼にはショックだった。毎日学校に通う兄安昌を見て、忠雄は自分も学校に行くと言いつ出し、安昌について行つたと矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』は書く。さらに「当時の小学校は融通がきいたのだから、何よりも、幼い忠雄が皆について行ける学力を示したことがこの異例を可能にしたのだろう」と付け加えている。『矢内原忠雄全集』第二十九巻収録の年譜は、「明治三一年五歳」の項に、「4（月）富田尋常小学校一年生に仮入学」とあ



り、(明治32年6歳)の項には、「4(月)富田尋常小学校2年生に編入」とある。が、実際には、仮入学前から安昌について行き、机を共にして学んでいたのである。

富田尋常小学校は、現在今治市立富田小学校となつて、今治市大字上徳甲三九四―四に所在する。わたしは二〇一一(平成二三)年五月十六日、この学校を訪れ、神野武校長から富田小学校に関するさまざまなことをうかがった。また、『世紀を刻む』という、B5判四六八ページに及ぶ大冊の百年誌まで頂くことになる。この本からは、矢内原忠雄在学当時の学校の雰囲気、よく伝わってくる。付言すると矢内原忠雄の生家の地を案内してくれたのも、神野校長であった。

富田尋常小学校は一八九〇(明治二三)年五月、旧松木村の児童も通っていた町谷尋常小学校と、喜田村や東村などの児童の通う拝志尋常小学校が統合されて創設された。校地が現在の上徳の地に新築移転したのは、一八九五(明治二八)年十月なので、忠雄や兄の安昌が通つたのは、現在の校地に建っていた旧学舎であったことになる。まだ、この学校に高等小学校が併設されていなかった時代である。上徳は地図を見ると富田村の中央にあり、近くには村役場もあった。矢内原家から約二キロ、子どもの足で二十五分というところか。校舎と校庭は児童数の増加と共に拡張されて、越智郡筆頭の小学校が次第に形成されることとなる。開校当時から植えられていた校庭の真中にあつた柳の木は枯れたものの、大正年間に植えられたという裏門付近のくすの木は、今も健在である。

さて、矢内原忠雄が学齢に達する前に兄安昌に付いて行き、仮入学してしまつた当時の富田小学校の校長は、山田安太郎である。富

田小学校第四代校長にあたる。忠雄は数え六歳、満五歳で小学校に入つてしまつたのである。学校史の『世紀を刻む』によると、富田小学校は戦後の一時、都市化による人口増で児童数は一二〇〇名を超え、三十学級に及ぶ大規模校になるが、当時(明治三二)の在籍数は男子一四五名、女子九九名、計二四四名であつた。忠雄と同年生は、卒業時の記録で九十一(男子三九、女子五二)名である。当時の教員は『世紀を刻む』によると、校長のほか、訓導は森亀一郎と三宅川秀逸、準訓導は小笠原晃と檜垣喜平太となつている。校長を含め五名の教員構成というのは、在籍児童数を考えると余りに少ない。恐らくは他にかなりいたと思われる代用教員の名が省かれているためなのであろう。訓導・準訓導の布陣は、忠雄在学の四年間変わらぬ。

忠雄は一月生まれの、いわゆる早生まれである。遅生まれの子に比べると早生まれの子は、体力的にも学力的にも当初は遅れを取ると一般的には考えられる。しかも、忠雄は満五歳での仮入学だ。ハッピーは大きかつたのではないかと思われるが、決してそんなことはなかつたようだ。もともと、彼は生まれながら身体は丈夫で、物わりの早い、賢い子であつた。優れた遺伝子の持ち主であつたのである。文字や数も仮入学前に、いつの間にか習得していたという。

富田小学校の学校史『世紀を刻む』には、一八九八(明治三一)年入学、一九〇二(明治三五)年卒業の児童名も載っている。その中に窪田佳津見という男子の名が見出せる。この窪田は、後年今治市の原印刷合資会社の重役となるが、『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』に、「忠雄さんの追憶 竹馬の友」という一文を寄せている。

忠雄の小学校時代と後年の交わりを語る貴重な文献だ。その冒頭部分を用いる。

忠雄さんは私と同じ愛媛県富田村の生まれで、お父さんの謙一さんは、その頃新進の医学を修めた有名な開業医者であった。

忠雄さんは男三人女二人の五人兄弟の次男坊で、私とは当時の富田尋常小学校から一緒に机をならべて勉強した一番仲のよい友人であった。四年で小学校を卒業ののち続いて二人は河南高等小学校へ入学し、いつも仲よくハカマをはいて通ったのを覚えている。当時の受持の秋山常五郎先生は二人を大変可愛がって下さったが、本年春、九十歳の高齡で亡くなられた。

忠雄さんは非常に温和しい性質でよく妹や弟達を可愛がって学習を見てあげた様でした。もちろん学校は小学校一年からずっと首席で押通した。

特に習字が上手で十一歳のとき二人で、県の展覧会へ出品する「文武方升」と云う文字を半折に練習し互いに比較競争した。忠雄さんが入選した。

明治三十五年大阪で第五回内国勸業博覧会が開かれたとき、当時高等小学校一年生の忠雄さんと私とがとくに許されて三、四年生と一緒に見学に行った時の思い出は、今でも目の前に見えるような気がする。

今治の吉忠の浜から大阪行の蒸気船に乗り、多度津港でセンベイを買ったり、大阪の谷町の、お寺の宿で同じ床に寝た一週間は夢のようだったが、非常に楽しく忘れられぬ思い出の一つ

である。

小学校時代の忠雄は、成績よく、毛筆の字のうまい子であったことは、右の窪田の回想からしても知れる。県の展覧会に学校代表で出品するため、小学校時代から特訓されて忠雄の毛筆の字は上達した。ただし楷書である。行書や草書までは字はなかったらしい。忠雄の残した少なからぬ毛筆の文字は、ほとんどが楷書である。

忠雄は学業・行動とも他の児童を抜きん出していた。それゆえ矢内原の二人目はできるとの風評が広まった。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、彼がよくできる子、神童などと周囲から称賛されたことは、「忠雄の性格形成に対して深いところで大きな影響を及ぼしたであろうことは推察される」と書き、加えて「幸いにしてこういう周囲の者の賞讃によつて増長することもなく、普通の子供として素直に成長したようである」とも書き添えている。

富田尋常小学校には、未だ高等小学校は付設されていなかった。当時は尋常小学校の四年生までが義務教育で、その上に高等小学校四年が設けられていた。中学校へ進む者は、高等小学校の二年を修了しなければならなかった。忠雄は窪田佳津見らと河南高等小学校へ通うことになる。兄安昌は、富田小学校の卒業生名簿にも見られるが、すでに一九〇〇（明治三三）年三月に富田尋常小学校を卒業、河南高等小学校へ進学していた。

河南高等小学校は五カ村の組合立の学校で、場所は富田村大字上徳字大道ヶ上乙百十一―二番地に設置されていた学校である。一―四学年各一学級であった。松木の矢内原家からは、二キロぐらいの距離があった。河南高等小学校は、各小学校に高等科が設置される

に及び、一九一〇（明治四三年三月限りで廃校となる。現在JR伊予本線の伊予富田駅前、県道沿いに「河南校跡」の石碑が建つ。忠雄は河南高等小学校で二年間過ごし、次に神戸市の雲中高等小学校で一年を送ることになる。その次第を以下に記そう。

忠雄や兄安昌の父、矢内原謙一は、子どもの教育には熱心であった。そこで忠雄が高等小学校二年を修了すると、三年を終えた安昌とともに、二人を神戸中学校に入学させることにしたのである。なぜ神戸中学校なのか。矢内原伊作は「当時神戸中学は関西での教育界の名門であり、今治の外でよい中学に入れるとすれば、神戸中学が最適だった上に、安昌及び忠雄の従兄にあたる望月信治が神戸中学校の教員をしていて、この二人をあずかることを承諾したからである<sup>13)</sup>」と言う。望月信治は数学担当の教師であった。そこで二人は、神戸中学校に願書を出す。が、安昌は高等小学校三年を修了しており、年齢が満ちていたから出願し、文句なく入学出来たものの、忠雄は富田小学校に一年早く入学しており、高等小学校を二年修了とはいえ、満十一歳だったため、学齢未滿につき却下されてしまう。小学校入学は大目に見てくれても、中学校はそうはいかなかったのである。

こうしたことは当時よくあったらしく、後年、忠雄と同じ一九一〇（明治四三年九月、第一高等小学校に入学した松岡譲も、尋常小学校に一年早く入学していたため、地元の新潟県立長岡中学校へ入学願書を出した際、一年のさば読みが発覚、高等小学校の三年生を却下されてから再出願して入学することになる。忠雄の場合は願書が却下されると、河南高等小学校に戻るわけにも行かず、神戸市立雲中尋常高等小学校の高等科三年に転入学した。一九〇四（明治三七）

年、日露戦争のはじまった年である。

神戸市立雲中尋常高等小学校は、神戸市中央区熊内町三丁目一七に現存する小学校である。創立以来一三〇年以上の歴史をもつ。わたしは二〇一一（平成二三）年五月十三日、この学校を訪れ、東瀬戸譲校長に案内されて校舎四階にある「雲中歴史資料館」を見せてもらった。神戸の伝統ある小学校の資料館にふさわしく、昔の校舎の模型や、十二の教えを明治天皇の后が書いたとされる金屏風などもある。大学や高校は別として、校舎のほぼ中央のよい位置に、こうした資料館をおく小学校は珍しい。近年の児童数減少が空き教室を誕生させたことから来る施設だと思うと、児童数の減少はマイナスのみではないようだ。

東瀬戸校長からは、資料館の説明を受け、「雲中ものがたり」という学校紹介誌を戴く。校長室には「常に思ふ／雲中の月／八十周年祝 忠雄」と美しい文字で書かれた額が掲げられていた。一九五三（昭和二八）年十月二十三日、当時東大総長だった矢内原忠雄は、雲中小学校八十周年記念会に出席し、全校児童の前で話をしたが、額の文字は、その時に学校側の要望で書いたものと思われる。

なお、その折りに、朝会で児童に語った内容が、雲中小学校発行の雑誌「雲中」に掲載された<sup>14)</sup>。ユーマアに満ちた話である。忠雄には、こうしたユーマアがよく似合う。おそらく下原稿を用意して話したのであろう。現場の校長先生の話にも勝るとも言える。あえて全文を引用する。

みなさんお早う。

私は今から五十年前、この雲中小学校で教わったのです。

たった一年間だけお世話になって、生田川の下の神戸一中に入れてもらったのです。雲中小学校で教えてもらったおかげで、立派な中学校に入れたのです。「ねこの子は、三年飼ってもその家を忘れる。犬の子は三日飼っても家をおぼえている」という話があるね。私は一年間だけ雲中小学校で教えてもらいましたけれども、その御恩を、今でも忘れないから、まあ犬の子の方だね。今日は八十年のお祝いで、東京から来たのです。

私が習いました時の校長先生は、笠原先生といまして、かみの毛の赤い、どじょうひげの、色の白い先生だった。受持の先生は青木先生といって、かみの毛の黒い、大きなひげを生やしている先生だった。体操の先生は、真黒な顔をした、大きな声で号令をかける、とてもおそろしい先生だった。それから唱歌の先生もいた。英語の先生もいた。私達の習った唱歌に、アメリカのワシントンの歌という独立の時の歌があった。「ここにたちたるワシントン」というところがあるの、唱歌の時間に、ある子供がワシントンを忘れたの、そして大統領のリンコンとまちがえたの、そして「ここにたちたるリンコロリン」といって大笑いしたことがありますよ。そんなこともおぼえている。それから、私は田舎からきて、雲中小学校に入ったので、お友達が一人もなかった。言葉もわからない。神戸の言葉がわからない。今、あなた方は自分のことを何というの？「ぼく」という？「わい」という？お友達がなかったの、校舎のかべによりかかって一人で、ぼつんとしていた。そして、同じ組の人がきて、「お前！ わいと遊ばんか」といった。それが私の最初の友達であったの。名前は忘れてしまったが、大

へん親切にしてくれたので五十年たった今でも、うれしいのです。だから、あなた方も、こんないい学校で勉強しているのですから、先生の顔はよくおぼえておきなさいよ。校長先生の顔はどんな顔をしていらつしゃるとかね。よく勉強して立派な人にならなくてはいけないと思います。お友達や、よそから来た人に親切にしてあげなさい。いじめたりしないで「一しよにあそぼう」といって、仲よくしてあげなさい。そうすれば、いつまでもその人はおぼえていて、御恩に感じるからね。うれしく思うからね。学校の御恩や、先生の御恩やお友達の親しいことばなどはいつまでも忘れないようにね。よく勉強し、立派な人になって、雲中小学校の名誉をあげて下さい。

たった一年の在学に過ぎなかったが、雲中小学校での生活は充実していた。高等科三年に編入した忠雄は、当初は神戸という大都会の学校にまごついたものの、すぐに馴れて勉強に打ち込むことになった。矢内原伊作は忠雄遺品の雲中校高等科時代の各科練習帳・筆記帳類を点検し、「例の達筆の毛筆で各科にわたって詳細克明に記入されており、その勉強ぶりには舌を捲くほかない」という。忠雄は神戸市葺合上筒井一七五七―三の従兄の望月信治宅に、兄安昌とともに寄寓し、雲中小学校に通った。安昌は一足早く、神戸中学校へ入学、中学生生活をはじめていた。

#### 四 神戸中学校

一九〇五（明治三八）年四月、矢内原忠雄は雲中尋常高等小学校

高等科三年を修了、晴れて兵庫県立神戸中学校（のち第一神戸中学校と改称、現、兵庫県立神戸高等学校）に入学した。現在の神戸高校は、摩耶山麓の神戸市灘区域の南通二丁目五番一号に所在するが、開校当時は三宮に近い新生田川沿いの二宮橋近くにあった。忠雄の通ったのは、むろんこの二宮橋近くの学舎である。

わたしは神戸高校に電話し、アポを取って調査のため訪問した。神戸高校では、学校史関係の仕事を長年担当されている永田實氏が約束の時間に待っていてくださった。永田氏は浩瀚な『神戸高校百年史―学校編』<sup>16</sup>の編集委員や、それに続く『神戸高校一一〇年史』<sup>17</sup>の編集委員長を歴任しており、神戸高校の歴史に詳しい方である。実にふさわしい方が、わたしの調査に対応してくれたことになる。

永田氏はさまざまな資料を用意し、神戸高校の歴史や現況を語ってくれた。資料のいくつかはいたただくことになる。『神高のしおり 四訂版』<sup>18</sup>『一年のあゆみ（百周年特集号）』<sup>19</sup>『同窓会報32号』<sup>20</sup>『神戸と聖書』<sup>21</sup>などである。神戸高校は略称「神高」、忠雄時代は「神中」と呼ばれた。なお、一九〇七（明治四〇）年四月、学校名が兵庫県立第一神戸中学校と改称されているが、本評伝では、おおむね神戸中学校（神中）の名称で通すことにする。

さて、兵庫県立神戸中学校は一八九六（明治二九）年四月一日、神戸市葺合区二宮町一丁目に開校した。兵庫県では姫路中学校に次いで、豊岡中学校と並んで二番目のことである。わたしはこの学校発祥の地を、永田實氏に案内をして貰い、見てきた。現在の加納町三丁目交差点を東へ真っ直ぐに進み、生田川に架かる橋の手前西南部の一角である。校地は池を埋めて造成したという。まだ、周囲一帯は自然の豊かな畑や田圃であった。忠雄は、厳格で生徒から「鬼」

の綽名をもらっていた従兄の望月信治宅から、徒歩で神戸中学校へ通った。神中の学内誌に寄せた忠雄の文章に、「中学の五年間」<sup>22</sup>というのがある。自分のことを「彼」と書き、客観化したところに特色を示す文章である。卒業後七年、当時を回想した文章である。冒頭部分、――入学試験の成績発表から一年生のころを扱った箇所を引用しよう。

彼は三十八といふ番号札を貰って講堂の東北の隅に坐つた。試験監督の先生達は靴に鳴皮を入れてピシリ／＼と見廻られた。併し未だ世の中の悪の勢力を知らなかつた彼には恐怖といふ念も起らなかつた。彼は嬉々として試験を受けた。それでも成績発表の時彼等一群の少年が汽車の切符を買ふ様に講堂の前へ列んで、いけなかつた者は「お前はあかん又来年お出で」と言はれるのを聞いた時は流石に胸騒ぎした。彼は幸に及第して居て講堂の中に入ることが出来た。其処には黒縁の眼鏡をかけた稍、胡麻塩頭の円い赤ら顔の先生が居て「入学許可候条来る四月九日云々」と紙に書いてくれた。それは半田先生であつた。先生は実にこの日から卒業式の日迄彼等の級の世話をして下さつたのだ。

それは日露戦争の第二年、彼が十三歳の春であつた。彼の小さい身体には憂ひの影も悲みの雲も翳さなかつた。汚れの意識も無かつた。喜びのみが溢れて居た。彼は始めて着た白の小倉服の金釦を光らし乍ら、靴の爪先きを被ふ位の幅広いズボンを買った。ついで早雄鹿が春の目を浴びて芝山を跳びまはる様にして学校へ行き来した。彼の住居は上筒井であつた。当時は生

田川のこちら側には家らしき家とはなく神若橋の袂には大きな葺畑が二つもあった。小さい虫の多い大根畑の間の小路が彼の通学用の道であった。

第二学期に二人の先生が新任して来られた。一人は歴史と国語の先生で其御姓名が少からず彼等の好奇心を唆つた処へ教科書無しで滔々と歴史の講義をせられたので「今度来た先生は偉い」と感心してしまつた。「この時時平は年が二十九でわしと同年代」と先生は言はれた。之は奥村先生。も一人は英語が受持で洋服の色、お顔つきなどで悪太郎がすぐにか御紳名を奉つてしまつた。之は大崎先生。このお二人にも五年の終迄ずつと御世話になつたのである。

入学から一年生時代の箇所を引用したが、入学当初の忠雄少年が活写されている。忠雄在学中の校長は、鶴崎久米一である。創立以来の校長で、学校の基礎を築いた名校長とされる。鶴崎は一八五九（安政六）年五月二十日、諫早の佐賀藩士の家に生まれ、ウィリアム・スミス・クラークが教頭として勤務した札幌農学校に学んだ人である。鶴崎は二期生として入学、内村鑑三・新渡戸稲造・宮部金吾らと同期となる。クラークの直接の教えは受けなかつたが、「イエスを信ずる者の誓約」に署名することになる。クラークが遺した教育の理念、――開拓者精神、自治と鍛練主義、個性の重視と自由を重んじる気風は、彼の身に染みつくこととなる。

鶴崎久米一は農林技師を務めた後、教職に転じ、新潟県農学校や愛知県尋常中学校、長崎県尋常中学校の教諭を経て、満三十六歳で、神戸中学校の初代校長となつた。日清戦争直後の国威発揚の中

で、政府は人づくりに力を入れ、中学校増設を急ぎ、人材を広く求めていたのである。鶴崎は神中の校長に就任すると「質素・剛健・自重・自治」の四綱領を定める。明治三十年前後に輩出する多くの旧制中学校は、「質実剛健」を学校のモットーとしたが、神戸中学校は、それよりはるかにデモクラティックな内容の標語を掲げていたことになる。

矢内原忠雄が神戸中学校に入学した一九〇五（明治三八）年は、学校は発展途上にあつた。校長鶴崎久米一は優れた教職員を集めるのに心血を注いだ。有能な教師を招聘し、あとは各自の力量に任せたのである。やがて神戸中学校は、県下に名だたる学校との評判を確立した。創立十周年を迎えたこの年五月、記念式で鶴崎校長は、「生徒心得」を撤廃すると宣言した。先の『一年のあゆみ（百周年記念号）』によると、校長の鶴崎は、「質素・剛健・自重・自治、この四か条こそ諸氏の先輩がつくつた校風の結晶である。今日創立十周年を迎えるにあたり、この四か条のみ残して、他の規則すべてを撤去する。そして校内規律の一切を諸氏の自治にまかす。これは諸氏に対する絶対の信任である。しかし、名譽の裏には責任がある。もし、諸氏あるいは後輩がこの信任にそむき、校風が乱れてきたときは、諸氏は先輩に対して、大きな責任を負わねばならない」と説いたという。

矢内原忠雄に「教育書生論<sup>23</sup>」という文章がある。ここでは鶴崎校長を評して、「第一教師に対しても生徒に対しても信頼を旨として干渉を主義とせられない、教師は鶴崎校長の下にあつて大変働き易いといふ事を聞いた、生徒も亦校長の下にあつて余り束縛を感じなかつた、生徒心得を全廃して所謂自治を許されたのは之れ警察的の

取締よりも積極的の訓練を重しとせられたによるであらう、五年級時代の自治権は実によく訓練であつた」と書いている。鶴崎校長はクラークの札幌農学校のような理想の学園を考えていたかのようである。右の矢内原の文章は、続いて「校長さんは道德の長談義を以て生徒を薫育せんとはせられなかつた、お蔭で我々は大に助かつた。而かも自重自治質素剛健は校長のあまり説かれなかつたに拘らず今なほ僕には中学時代の感銘が残つて居る」とある。

こうした教育の原点は、鶴崎の学んだ札幌農学校にあつた。蝦名賢造『札幌農学校クラークとその弟子達』<sup>24</sup>には、それをクラーク精神ということばで説明する。一部を引用しよう。

札幌農学校は明治新政府によつて創立された官立の学校でありながら、官学という名称をはるかに超えて、学問の自由と豊かな人間性教育を追求した学校として、まったく異色の学校であつた。ことに農学校においてキリスト教の教典たる聖書にもとづく教育が認められ、行われたことは、官学としては最初にしてかつ最後のものではあつた。私学として自由主義教育を標榜してきた慶應義塾大学や、新島襄の創立によるキリスト教主義の同志社大学などとならんで、人間性の尊厳と学問の自由を重んずる学風が、農学校全体のなかにただよつていた。そしてこれらの基盤に立つていたのは、まさしく教頭のクラークの教育精神であつた。

また、「クラークの理想」と題された箇所、蝦名賢造は次のように書いている。これは神戸中学校で鶴崎久米一が行つた教育とい

かに似通つていることか。以下に引用する。<sup>25</sup>

開校にあつたて假学校時代の苦しい経験を持つて居る当局者たちにまず課せられた問題は、早急に学則を定めることであつた。開校式を終えた数日後、彼らは学校規則の設定を持ち出してクラークに意見を求めた。当局者たちの言葉を黙つてきいていたクラークは、はつきりと、つぎのように力強くいつた。

「こんな細則を設けてする教育では、真の人間教育ができないのではないか。紳士たれ Be Gentleman それで沢山ではないか」

人々は返す言葉をもたなかつた。そのため、細則云々の話は自然と立ち消えになつてしまつたのである。クラークは嚴重な規則によつて生徒を威圧し統御してゆこうという教育方法を、すこしも考えていなかつた。生徒を規則によつてしぼろうとはせず、むしろ煩雜すぎるほどの規則を排して、生徒自身の良心にまかせる方法をとりうとしたのだった。

くり返すが、これは鶴崎久米一の教育理念と重なる。鶴崎は学校規則である「生徒心得」をはじめ、校内規律の一切を廃し、生徒の自主性に委ねたのである。クラークの Boys, be ambitious! のことばで知られる札幌農学校の校風は、兵庫県立神戸中学校に初代校長鶴崎久米一によつて移植されたといふべきか。後年の「内村鑑三伝〔未完〕」<sup>26</sup>には、札幌農学校を論じ、第二期生の鶴崎(当時の名は、村岡)久米一の名を出し、次いで「私自身の母校たる神戸中学校の校長として令名高き教育家であつた」と言い、さらに次のようにも言

い添える。

氏が創立早々の神戸中学校に赴任するや、煩雑なる生徒心得を廃して「自重自治」を生徒の綱領と為し、又華奢なる神戸商家の子弟の氣風を改めて、「質素剛健」の校風を育成する等、その非凡の見識と手腕は、今にして思へばことごとく札幌農学校に於けるクラーク博士の遺風を継いだものに外ならない。

神戸中学校の校風は、札幌農学校の校風を引き継いだものだというのである。矢内原忠雄は右の文章に続けて、「私は中学時代の校長として鶴崎久米一をもち、高等学校時代の校長として新渡戸（大田）稲造をもち、而して十九歳の秋以来終生にわたる基督教信仰の師として内村鑑三を有つ。私の恩師といふべき者は、ことごとく札幌農学校第二期の同級生から出て居る。かく思へば、まことにわたしも亦札幌の子と言はざるを得ないのである」と書く。が、これは後年の成熟した眼が回想したものであり、中学時代には「札幌の子」の自覚はなかつたろう。

鶴崎は高邁な教育理念と優れた学校経営能力の持ち主であつた。矢内原忠雄がこの校長の下、五年間の中学校生活を送れたのは、幸せであつた。忠雄が五年生になつた一九〇九（明治四二）年四月から、生徒は登下校時にカーキ色の制服・制帽を着用するようになる。カーキ色の制服に関して、矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』では「忠雄の四年生になつた年」（注、明治四二）からとあるが、神戸高校の『神高のしおり』<sup>27</sup>にも記されているように、「明治四二年四月から」が正しい。

このカーキ色の制服については、よく日露戦後の国威宣揚の下での処置のように言われるが、決してそうではないと神戸中学校・高等学校の学校史にタッチされた永田實氏は強調される。カーキ色の制服・制帽には、「質素剛健」の意味が込められていたのであり、時代色としての意味はないと。現在神戸高等学校となり、上野が丘に建つ校舎の体育館の外壁には、神中時代の制服・制帽の色がどんな色だったかを示すような、枯草色の陶器が貼り付けられている。よく見ると陸軍の兵隊が着用した服の色よりずっと淡いカーキ色である。この制服・制帽の色は、戦後になつて、誤解されることになる。

すでに矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』が指摘していることであるが、大内兵衛の「赤い落日―矢内原忠雄君の一生」<sup>28</sup>の一節には、以下のようにある。「当時この学校は天下の名門であり、この校長の鶴崎久米一はストイックな教育で有名であつた。鶴崎は内村鑑三・新渡戸稲造とともに札幌農学校でクラークに育てられた人であるが、日露戦後のこの時代には教育の照準を軍国日本においていた。そこで少年忠雄もカーキ色の制服制帽に巻ゲートルをはき、冷飯の弁当を運動場で立食した」と。大内の「赤い落日―矢内原忠雄君の一生」は、忠雄没後書かれた多くの追悼文の中では、群を抜く一級のものながら、矢内原伊作も言うように、引用した右の箇所に限つては「事実と相違している」のである。時代がたまたまカーキ色を連想させることからくる誤解である。また、巻ゲートル（茶色巻脚絆）着用は、『神高のしおり』によれば、一九一五（大正四）年四月からで、忠雄卒業二年後のことである。これまで見てきたように、鶴崎には「自重・自治」の精神を植え付けようとした意図はあつても、時代



迎合の教育は見出せない。

矢内原忠雄の中学時代の資料は、比較的多く残っており、それらは現在『矢内原忠雄全集』第二十七巻に収録されている。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』<sup>29)</sup>は、それに加えて未公開の日記を十分に用いて、中学校時代の忠雄を縦横に描く。こうした点では遺族の手になる伝記は、実に威力を発揮するものだ。そこで本評伝では『矢内原忠雄伝』に寄りながらも、全集収録資料に再検討を加えつつ、中学校時代の忠雄を見ていくことにする。

神戸中学校時代の矢内原忠雄は、先に引用した「中学の五年間」に見られるように、「憂ひの影も悲みの雲」もない純な心をもった少年であった。神戸中学校には鶴崎校長が招聘したすぐれた教員が次々に赴任した。「歴史と国語の先生で其御姓名が少からず彼等の好奇心を唆つた」と右の文章に紹介されている奥村奥右衛門は、忠雄の作文指導をすっかりやった。矢内原伊作は忠雄が若くして名文を書くことの出来た理由を、この奥村の指導の賜物と見る。そして「(奥村は)すべての作文に朱をいれて文章の書き方を指導し、訂正すべきところを指摘し、きわめて懇切な長文の批評をしている。忠雄はよく勉強したが、よい先生にも恵まれていた」<sup>30)</sup>と書き添える。他に三年生の時に赴任してきた、島地雷夢という修身の教師もいた。島地は幅広い教養を身につけたクリスチャンで、型破りの授業をしたという。

中学生矢内原忠雄は、すでに何度かふれたように、「悟蔭」と署名した文章を書いていた。その文章は、確かにうまい。後年の文筆家矢内原忠雄の片鱗が早くも顔を出しているのである。それは全集第二十七巻収録の「作文帳(自明治四十一年十月 至明治四十三年一

月)」を一覧するだけでも言えることだ。奥村奥右衛門の指導は、懇切丁寧であった。もともと書くことの好きだった少年忠雄は、以後書くことの世界で大きくはばたく。

「作文帳」の「第四年級第二学期」文末に(明治四十一年)十月十四日稿)とある「本校校風を論ず」<sup>31)</sup>は、中学生矢内原忠雄の在学中の神中への思いを知り、それを語る文章力を診るのに恰好の素材である。長くなるが、その全文を掲げる。

殷盛なる神戸の市街を稍、遠ざかり、生田の東、布引の南、楊柳の樹繁れるが中に屹然として立てるは、そも何の校ぞ。当今、虚栄の俗流滔々として、奢侈軽薄の風、日に進むも、尚、慊らず。然もこの校は超然として、独り清めり。ここに出入する生徒は、質素にして快活、自ら治めて礼儀あり、恐れず、さりとて誇らず、燦として異彩を放てるにあらずや。そも何くの生徒ぞ。何ぞそのよく整へる。見る者をして欣慕の情に堪へざらしむ。

わが第一神戸中学校こそ、この校なれ。われらこそ、この生徒なれ。

華奢の賊、浮薄の奴、力をつくして攻むるとも、わが校門は一分の隙も示さざるなり。鉄壁あるに非ず、大砲あるに非ず、たゞ一の校風あるがためのみ。なほ、大和魂がわが国民に於けるが如し。これ有る限りは、何物と雖もわが校を顛す能はざる也。

わが校風とは何ぞ。質素剛健なり、自重自治也。質素とは奢侈ならざるをいひ、剛健とは軽浮柔弱ならざるを云ふ。自治と

は、他人に依頼せざるを言ひ、自重とは卑屈ならざるを言ふ。すべて当世の風潮に逆ふもの、その創設と実行とは、実に容易なる業には非ず。十年の昔、本校創立以来、校長閣下及諸先生の尽力と、幾多の先輩の拮据経営とは、此玉の如き校風を生みたるなり。事、善なりと雖も、世運に逆ひては、孔子もなほ成功せざりしには非ずや。この美しき校風を創めし、校長閣下及諸先輩の苦心は如何ばかりなりしならむ。かくて校風は入学する生徒の悉皆を感化し、彼等の帽章に宿りて、その行動を監督す。他に比なき立派なる校風は、他に類なき慘憺たる苦心の末に成りしものぞ。吾人は深く之を思はざるべからず。わが卒業生は社会に於て尊敬せられ、在校生は他校生徒の模範となり、而して神中の名声はます／＼天下に轟くは、一に校風の賜ならざるはなし。我等がかゝる名誉の地位を得たるは、わが校風の創成者の恩恵なり。而してこの恩に報ゆるには、校風を守るを措きて又何かある。

吾人は校風を遵守して神中の名声を汚さず、また、此の消滅を防ぎ、発展を講じ、以てこの美風を後輩に伝へざるべからず。これ実に、わが校に対する責任なると共に、また諸先生、諸先輩に恩を報ゆる所以なり。

校風の最も完備せし頃は二三年前のことかと覚ゆ。当時の生徒は真に校風の権化とも見るべし、俗物以外に超然たりしといふ。あゝ、満つれば欠くる世の習、虚栄を好むは人の常、近時に至りて、わが校風も聊か曇を生じたりと見しは如何に。校風すたれしに非ず、生徒の心腐らんとせるなり。思ふにわが校の盛名、国内に普く、生徒はやうやく太平に馴れて校風の意を誤

り、自治を自由とし、自重を自惚とし、はては質素剛健よりも奢侈軟弱を好むに至りしならむ。粗暴はもとより善からざれども奢侈軟弱はこれにも劣る。実に校風の興廢は、神中の盛衰なり。起てよ、五百の健児、諸氏の怠惰は將に校風をして衰頽せしめむとせるに非ずや。

校風を乱して何の顔あつて先輩に見えんとはする。諸氏よ、守れ校風を。余は進んで拡張するを願はず。目下の急務は保守にあり。今、拡張せんとするは、なほ門を開いて敵を待つが如し。弱きに乘ずる賊は、またたくひまに、わが校風を蹂躪せむ。発展すべきは、校風の基礎、鞏固なる時なるべし。根元危き時に他に手を出すは、内を顧みざる基なり。従来の校風大に可なり。改むべき必要を認めず。保守とて進歩なしと言う勿れ。思へ大英国の今日を。これ、その保守の功多きによるに非ずや。われらは校風を維持して、その基礎を鞏くすべし。これ、後の失敗を未然に防ぐものなり。更に発展すべき要あらば、わが後輩安全に之を成さむ。

講堂に入れば、正面には、「質素剛健」「自重自治」の二額を掲げたり。本校生徒たるもの、一度、足を講堂に入れば、自ら肅然として襟を正さずんばあらざるべからず。あゝ、此の扁額の文字をして空文たらしまざるはそも誰の責任ぞや。眼をあぐれば、わが校は多年の風雨に曝されて、骨もあらはに立てり。世は移り人心は転じ、わが校風も將に一変せんとす。この教室、この運動場、今や如何なる涙を催すらむ。而して見よ、かの破窓よりは、質素剛健、自重自治、相提携して出で去らんとするをり男子の精神、一度到れば金石と雖もなほ透す。われら

本校生徒たるもの、奮励努力、以て校風の維持に勉めずして可ならむや。

漢語を自由に駆使して、神中じんちゆうの校風を高らかに述べ、擁護した文章である。内容を要約すると、神戸一中の質素剛健・自重自治の校風は、校長以下諸先生の尽力と幾多の先輩の努力によって築かれたもので、その名声の天下に轟くのは、一に「校風」の恩恵である。この校風を遵守して、後輩に伝えるのが肝要なのだ。校風を乱して何の顔あつて、先輩に見えんとするか、校風の維持こそ大切だと説く。改革よりも保守を前面に突出した見解である。いまだ批判の眼を持たぬ純粹な愛校少年の考えが横溢している。けれども、注目したいのは、その卓抜した表現力である。まさに見事な文章と言うべきである。文末に教師の「よく校風に醇化し、しかも校風以上に超然たるものに非ずして何ぞこの正鵠を射る事を得んや、敬服」という短評が添えられている。この短評を添えた教師は、奥村奥右衛門と思われる。

矢内原忠雄は、中学生にして群を抜いた文章家であつたのだ。同年の十二月二日の日付のある作文「文章の作り方」<sup>30</sup>には、「この文明の世では、口と筆とは最も有力な武器であるから、この練習には、よほど、心を用ひねばならぬ」にはじまり、手紙でさえ慎重な態度で臨むべきで、「軽率に書き流したばかりでは、一向、価値がないのみならず、その作者の人格の卑しきことも見透かされる」と言い、次のように述べる。

すべて文章は、己が思想を吐露するものであるから、よく己が

思想が紙面に表れて居るのが第一で、美句麗辞にてなれるは第二である。いかに美しく文字が用ひてあるも、精神なければ即ち空文である。文章の目的を果さないものである。故に一の文を作るには、先ず、その文題に対して十分、思考を凝らさねばならぬ。即ち、その事に就て己が知れる総べての知識を思ひ浮べ、最もその文題に適せる事項、これを説明するに必要な事項をつまみ出し、これに順序をつけて文に組みたてる。順序は、先づ、前置と本文と結論との三つに大別し、このうちにも夫、細別をして秩序をたてねばならぬ。

実にしっかりしたものである。明治期に流行した常套的な美文を廃し、「己が思想が紙面に表れて居るのが第一」とし、「美句麗辞にてなれるは第二」とするのは、新しい考えである。そのためには文章の構成が大事だとし、「前置・本文・結論」を言う。これは序論・本論・結論と言ひ換えてもおかしくない。こうした文章の技術、——基本的構成法が意識されているから、その作文は破綻なく、即座に書けたのである。

推敲の大事なことにも言い及ぶ。「再三読みかへすうちに、冗字を省き、足らざるを補ひ、又は順序につき研究して改むべきは改めねばならぬ」という。「読んで見て聞き苦しきところは、必ず文字を改め、又は文脈を改めて、明瞭とせねばならぬ。修辭はこのときにする。次には誤字を直し、文法上の誤を直し、句読の点をつけ、なほ再三読み直し、すこしも聞き苦しきところなく、又誤りたる理論、誤字もなくつたならば、文章は出来上つたので之を清書する」と続く。さらに「清書はつとめて文字をきれいに書かねばなら

ぬ。文字の汚いのは文章の価を半減する」という、いかにも忠雄らしい評言が添えられる。忠雄が文字を楷書できれいに書くのは、小學校時代からのことであり、そのことはすでにふれた。この文章の指導教師の評は、欄外に「さすがに卓見」、文末に「此周密な考えがあればこそ、かの妙文を作り出す事が出来るのであらう。人格云々は君でなければ出ない言葉でしかも動かすべからざる事である」とある。彼の将来に互るおびたしい量の文章は、こうした文章観と文章技術の上に立っていたのである。矢内原忠雄は何はさておき、文章家であった。

先にもちよつと書いたが、矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』は、中學校時代の日記をはじめ、『全集』収録の「作文帳」や未収録の作文などを用いて、中学生矢内原忠雄の実像を詳細に語る。それによると、神中時代のスポーツは、柔道部と野球部に属し、日々練習に励んでいる。が、運動神経はそうよくもなかったらしい。野球などは補欠の組である。自転車なども乗れるようになるまでに時間がなかった。が、学校で柔道や野球をし、休日には山歩きを、家では冷水摩擦や鉄垂鈴を振うという生活は、彼の体を鍛え、身長はめきめき伸びた。入学時は早生まれであったこともあり、小さい方だった彼は、運動や節制で三年生の頃から背丈は急に伸び、四年生四月の体格検査では身長一六〇センチ、体重四十三キロにもなる。

この時期の少年は、一年間で七七八センチぐらいい伸びると言うから、五年生の四月には一六八センチぐらいいに、卒業時には軽く一七〇センチは超えていたことになる。忠雄は母松枝に容貌が似ていたと言われるが、松枝は先にも記したが、背の高い女性であった。その遺伝もあつてか、成人した忠雄は、長身の人となる。後年矢内原

忠雄を論じる人々は、皆、忠雄の背は高く、姿勢よく、貴公子然としていたと口をそろえて言う。例えば同僚として東大教授時代を過ごした大内兵衛は、その初対面の印象を、「ある日、白哲長身の青年が飄然としてあらわれた、そして、彼はそのあくる日から研究室の机に向つて、冷然として勉強をはじめた。これが矢内原助教授であつたわけである」と書く。また、第二次世界大戦後の東大で学生生活を送り、学生新聞の記者として総長の矢内原忠雄を訪ねたことのある西田勝は、忠雄を「すつと背筋の伸びた、威厳のある人」と捉えている。「背筋の伸びた」という表現に、その背の高さを連想させる。わたしは忠雄と一高基督教青年会で一緒だった長崎太郎の評伝を書いたが、その際ご遺族の長崎陽吉氏に、矢内原忠雄が長崎太郎らと撮つた写真を何葉も見せて貰つた。中学校入学当初は小さかつた少年ながら、一高時代の写真には、衆に秀でた体格と風貌を見せている。どれもが姿勢正しく写っている。

忠雄の神中時代の読書や日記にふれよう。「私は如何にして基督教者となつたか」<sup>36</sup>には、「私の中学時代の読書は井上哲次郎、徳富蘇峰、徳富蘆花、大町桂月の類」とあり、他のエリート中学生とさして代わりがない。これらの人々の影響を受けながら、彼は日々熱心に日記を付けている。もつとも日記を書くという行為は、当時の旧制中学校の生徒ならだれしも行つていたことなのである。形式はいろいろだが、人によつては博文館の当用日記にペンで書きつけた（高根一中時代の井川恭など）。

忠雄の場合はお得意の毛筆で、罫線の入つた和紙に記した。楷書を基本とした読みやすい字である。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、当時の日記を写した何葉かの写真が挿入されているが、どれ

もが実に丁寧に記入されている。忠雄のことゆえ、一応下書きし、それを見ながら清書したのかも知れない。忠雄が日記をペンで大学ノートに直接横書きで記すようになるのは、一九〇九（明治四二）年の一月一日からのことである。わたしは一九一〇（明治四三）年一高入学の井川恭（のち恒藤恭・成瀬正一・長崎太郎・松岡譲らの在学中の日記の実物を見ているが、彼らは皆、大学ノートにペンで横書きである。

ところで、中学校時代の忠雄には、いくつかの悩みがあった。一つは兄安昌とのかかわりである。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』には、全集には収録されなかつた部分の忠雄の日記もあえて紹介しながら、兄弟ゆえの關係の難しさや、兄へのやり切れない気持ちなどもしつかりと書き込んでいる。当時世話になっていた従兄の望月信治の家には、竹内正夫という生徒が同居していた。信治の友人の子で、なかなかの秀才だった。竹内は後年京都帝国大学医科大学を卒業、郷里の福知山で眼科医を開業している。竹内正夫は安昌が四年生、忠雄が三年生の時、望月家に同居したのであるが、間もなく竹内と安昌が「面白からぬ不義の交際」——おかしな關係にあるのを忠雄は知る。いわゆる同性愛である。しかも、その後忠雄も竹内と「同衾」するという事態が生じる。

矢内原伊作は忠雄の未公開日記を引いて、この事実を記した上で「正夫と安昌との「不義の交際」といい、忠雄の「同衾」といい、これらは思春期にある少年にとつてはむしろ自然な行為であつて、むしろん羞恥をとまなうから人に言うべきことでもないが、「不義」として非難したり、自分で罪悪感をもつたりする必要のないことである」と言う。けれども忠雄にとつては、それは「恥ずべき行」とし

て大きな悩みの種となる。また、兄安昌は鼻やリウマチ、それに心内膜炎という病氣を持ち、京都大学病院で鼻の手術をしたが、リウマチと心臓の病は治らず、別府に転地療養に出かけもしたが好転しなかつた。安昌は病氣のこともあつたが、忠雄に比べると意志が弱く、学校も欠席がちであつた。結局、安昌は厳しい神戸中学校での生活に耐えられず、鬼教師の望月信治にも見放され、郷里の今治中学校に転校する。

中学三年の夏、忠雄は望月家から養子に懇望されるという思いもよらぬ話もちあがる。『矢内原忠雄伝』には、その話を父から切り出され、当惑した当日、一九〇七（明治四〇）年八月四日の「夏期休暇日誌」が写真版で示されている。例の如く読みやすいきれいな毛筆体の記録である。「余は否を以て答へたり」との印象的な一文が眼に入る。「否」には、「ノー」のカタカナルビが添えられている。望月家の内紛も伊作の『矢内原忠雄伝』は、忠雄の「日記」をもとに、しつかりと書きとめていて参考になる。神戸中学校での忠雄の成績は抜群であつた。彼は日記に毎学期、毎学年の成績を記していた。『矢内原忠雄伝』には、四年生の時の学年成績が紹介されている。驚くばかりの好成績である。十三科目の平均九十五点、席次一番、欠席日数りとなつてゐる。

優等生矢内原忠雄の親友は、大利武祐おおとし たけすけであつた。同級の友である。大利は優等生ではない。ごく普通のまじめな生徒であつた。養母と二人暮らしの身で、家は六甲山の麓、音ヶ平（現、大土平町）にあつたから、通学には上筒井の望月家の前を通るので忠雄を誘つてくれた。二人は入学の最初の日から知り合い、通学の友となつた。そして五年の秋、望月信治が今治中学校に転勤し、寄宿宅を失つた

忠雄に手をさしのべ、二学期から音ヶ平の家に来るよう誘ってくれたのも、大利武祐であった。忠雄に「武さん」と題した文章がある。大利武祐が若くして逝ったのを惜しみ、偲んだ一文だ。四〇〇字詰め原稿用紙にして約二十八枚、武さんこと、大利武祐に寄せる厚い愛を描いている。

この追悼の文章で忠雄は、「気の合ふといふのは妙なもので、自分は深く彼に引きつけられた」と書く。二人は共に自然を楽しむのが好きで、休みの日には、摩耶六甲、須磨明石、箕面有馬などに何度も行き、小豆島の寒霞溪などにも行ったという。布引の水源を探検したのは、もつとも記憶に残ると記している。大利武祐は神中卒業後、進学しないで養母の面倒を見ることになる。一高に進学した忠雄は、東京から内村鑑三の『基督信徒の慰』や雑誌『聖書之研究』を贈っている。大利武祐が結核で若くして没するのは、忠雄が第一高等学校を卒業した一九一三（大正二）年の夏、八月十五日のことである。大利武祐のことは、本論「第四章 生と死」で取り上げ、くわしく述べることにしている。

注1 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年二月二〇日

2 『創立九十年記念誌』日本基督教団今治教会、一九七〇年九月一日

3 吉田正信校注『蘆花日記七』筑摩書房、一九八六年七月三〇日、一五〇―一六ページ

4 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月三日

5 矢内原忠雄「私は如何にして基督信徒となつたか」『通信』18号、一九三四年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。一四〇―一四二ページ

6 矢内原啓太郎「私共の家譜と生家」『矢内原忠雄全集』第二七巻「月報27」岩波書店、一九六五年五月一日、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄 信仰・学問・生涯』岩波書店、一九六八年八月三日収録。六四九―六五〇ページ

7 関口安義「悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六」イー・ディー・アイ、二〇〇四年七月三〇日

8 注5に同じ。一三九―一四〇ページ

9 矢内原忠雄「医学に望むもの」『主張と随想』一九五七年二月、のち『矢内原忠雄全集』第二巻収録。四四七―四四八ページ

10 今治市立富田小学校開校百周年記念事業実行委員会編『世紀を刻む』一九九一年三月二十五日

11 窪田佳津見「忠雄さんの追憶 竹馬の友」南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄編『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯』岩波書店、一九六八年八月三日収録。二七―二八ページ

12 注4に同じ。四九―五〇ページ

13 注4に同じ。五〇―五一ページ

14 矢内原忠雄「朝会で」『雲中』（いさ）特別号一九五四年一月、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。四一―四二ページ

15 注4に同じ。五一―五二ページ

16 神戸高校百年史編集委員会編『神戸高校百年史―学校編』一九九七年三月（日付なし）

17 兵庫県立神戸高等学校二〇周年記念誌小委員会編『神戸高校二〇周年誌』二〇〇六年五月一日

18 兵庫県立神戸高等学校「神高のしおり 四訂版」二〇〇八年三月一日

19 兵庫県立神戸高等学校「二年のあゆみ」第39号、一九九六年三月三二―三三ページ

日

- 20 兵庫県立神戸高等学校同窓会『同窓会誌』第32号、一九九二年三月一日、中に竹田行之「神戸一中の「高い山」―大塚金之助、矢内原忠雄、河野与一、松本重治、吉川幸次郎氏のこと―」がある。
- 21 「神戸と聖書」編集委員会編『神戸と聖書―神戸・阪神間の四五〇年の歩み』神戸新聞総合出版センター、二〇〇一年五月三〇日、中に佐治孝典「神戸高校と札幌農学校―鶴崎久米の場合―」がある。
- 22 矢内原忠雄「中学の五年間」兵庫県立第一神戸中学校校友会『会誌』第二十七号、一九一七年五月、のち『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。二九六―二九七ページ
- 23 矢内原忠雄「教育書生論」兵庫県立第一神戸中学校校友会『会誌』第二十五号、一九一六年五月、のち『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。二九四ページ
- 24 蝦名賢造「札幌農学校クラークとその弟子達」図書出版社、一九八〇年八月二十五日、一〇七ページ
- 25 注24に同じ。四七ページ
- 26 矢内原忠雄「内村鑑三伝（未完）」『矢内原忠雄全集』第二四巻、六四三ページ
- 27 注18に同じ。四ページ
- 28 大内兵衛「赤い落日―矢内原忠雄君の一生」『世界』一九六二年三月一日、のち『矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―』岩波書店、一九六八年八月三日収録。三三ページ
- 29 注4に同じ。六〇ページに矢内原忠雄の神戸中学校時代の作文が写真版で載っている。「自治」と題したもので、「梧蔭」と署名している。なお、矢内原伊作はこの作文を高く評価し、中学二年生の文章としてすぐれているばかりか、ここに後年の思想の原型を見ることができるとする。
- 30 注4に同じ。六一ページ
- 31 矢内原忠雄「本校校風を論ず」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。四九―五一ページ
- 32 矢内原忠雄「文章の作り方」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。五四―五五ページ
- 33 注28に同じ。六ページ
- 34 西田 勝「日中戦争への民衆の反応33」『非核ネットワーク通信』第一四七号、二〇一一年五月五日
- 35 関口安義「評伝長崎太郎」日本エディタースクール出版部、二〇一一年一〇月二〇日
- 36 注5に同じ。一四〇ページ
- 37 注4に同じ。八〇ページ
- 38 矢内原忠雄「武さん」兵庫県立第一神戸中学校校友会『会誌』第二九号、一九一三年六月、のち『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。二七三―二八七ページ